

館が高田郷御所跡なのである。懐良親王が移ってこられたのは正平二年（一三四七）十二月十四日で暫らく御滞在になり、宇土を経て菊池に、更に太宰府に進まれた。南朝方の優勢もしばらくの間にすぎなかった。

その後、征西將軍職を良成親王に御代りになって引退された。

良成親王は、元中七年（一三九〇）宇土落城後に八代に入られた。ここで南北朝合一を迎えられたのである。

懐良親王は元中三年（一三八五）三月二十七日、五十才で亡くなり、現在地に御墓ができ、良成親王はこの墓前に、懐良親王の菩提寺として、中宮山悟真寺を創建されたのである。

あの大揺れに揺れ、乱れに乱れた、南北朝期の戦乱に生きた懐良親王こそ、悲劇の人といふべきか。

我々の予定の見学は終わった。又小野英治氏の運転で、午后一時、八代を出発して、九州縦貫高速道路を走り熊本三里木あたりで五十七号線に移り午后四時すぎ、全員無事帰郷した。

（おわり）

東光庵の独歩文学碑

染 矢 勘 蔵

（佐伯市青山）

碑文

桜は己に散りたり。只落花紛々の景を賞するを得たりしのみ。吾等そのみにて満足したり。桜樹は二本あるのみ。されど何百年を経たりしとも知らざる老樹なり。なかなか世にめづらしき大木なり。立派なる庵あり東光庵と称す。

場所 佐伯市黒沢区東光庵境内

書及び選文 狩生熊義先生（佐伯独歩会会長・佐伯高校長）

碑身 高さ六七 cm 横八八 cm 奥行二〇 cm

台座 高さ五六 cm 横一一〇 m 奥行七〇 cm

佐伯史談会青山支部建立

昭和五十六年四月三日除幕

現在独歩の文学碑は、全国に二十数基を数えるという。若き日の独歩が佐伯で暮したのは僅か十カ月余に過ぎなかったが、こよなく佐伯の自然を愛し、寸暇をみてはし

きりに近郊を散策し黒沢の東光庵にも杖を引いた。

彼は『欺かざる記』の中で、東光庵の桜や黒沢の村のたたずまいを美文で描写し、佐伯地方で古来から有名であった東光庵の桜を世に広く紹介してくれている。

文学者としての彼の詩心をそゝり立てた桜の名木は、幸い今なお健在である。この独歩と桜のかゝわりを通じてその文学に親しみ、郷土をみなおしてたぐいまれな名



木を守り愛する心を養う一助にしたいと考えて、佐伯史談会青山支部はこの碑の建立を思いたった。

この碑の建立のため、佐伯地域文化財保存会から望外の寄付金をいただき、その外有志の方

々や青山の佐伯史談会諸賢の御援助を受けた。

また台座造りや建立当日の労力は、史談会の有志、黒沢老人クラブの方々、黒沢の有志の方々の奉仕で、困難な作業が事故なく終わるなど、農村社会には助け合いの良俗が、今に生きていることを確め得たことも建碑の功德であろうか。

除幕式は四月三日あいにくの雨であったが、桜の花は碑文そのまゝの状況の下で行われ、参列者三十数名の見守る中、狩生先生・山崎作一両氏の手により除幕された。

ささやかな碑ではあるが、佐伯独歩会長の狩生先生が『欺かざるの記』の中から選文され、麗筆でご揮毫下さったのを、碑面いっぱい陰刻した立派なもので、他に比して遜色のないものといささか自負できるものである。この度の建碑について、各方面から寄せられた物心両面の御援助に対し、深く感謝申し上げ、拙い紹介のペンをおく。